コーヒーブレイク

ビアガーデン革命

会員　山中 純子（64 期）

ビアガーデンが恋しくなる。日本ではビアガーデンといえば，ビルの屋上が思い浮かぶ。客は汗をかきながらも冷えたビールを飲んで盛り上がり，店員は忙しなく働く。私が留学していたドイツ・バイエルンのビアガーデンでは，大きな栗の木の葉が広がる下で，子供連れの家族や老若男女問わず様々なグループがパンやソーセージを持ち込み，ビアジョッキ片手に和やかに会話を楽しむ光景が広がっていた。実は，この光景は決して当たり前のものではなく，これを守るためにバイエルン市民が立ち上がった歴史がある。

人々にとって安く新鮮なビールを飲めるのは嬉しいものであるが，ビール醸造所がビールを直接一般市民に販売すると近隣のビアレストランが儲からないので，1812年1月4日，バイエルン王が条例を制定した。この条例によって，ビール醸造所は，ケラー（地下貯蔵室）のビールの販売許可を得る一方で，パン以外の食べ物の提供を禁止された。ビールを飲んでお腹をすかせた市民が近隣レストランに食べに行くことを狙った政策であった。しかし，期待に反し市民は食べ物を持ち込み，ケラーの上のベンチでビールとともに食事を楽しむようになった。このケラーの上こそがビアガーデンの始まりである。まだ冷蔵庫がなかった時代，ケラーを低温に保つためには，大きな葉で陰を作ってくれる栗の木が欠かせなかった。だから，今でも多くのビアガーデンに栗の木があり，夏の日差しを避けて屋外で心地よくビールを飲むことができる。バイエルンでは，今でも「ケラーの上に行こう！」と言えば，「ビアガーデンに行こう！」という意味だそうだ。こうして食べ物を持ち込んで屋外でビールを楽しむビアガーデン文化が根付いたのである。

しかし，そのビアガーデン文化に危機が訪れた。1995年4月20日，ミュンヘン行政裁判所が，あるビアガーデンに対し，近隣住民への騒音を考慮して21時30分には閉店しなければならないという判決を下したのである。これに対し，その約3週間後の1995年5月12日，2万5000人のミュンヘンの民衆が，「ビアガーデン文化を守ろう！」を合言葉にデモを行った。バイエルン州政府は，このデモを受けて「バイエルン・ビアガーデン条例」を制定した（Bayerische Biergartenverordnung，GVBl 142頁以下）。これが，バイエルンで有名な「ビアガーデン革命」である。

この条例には詳細な制定理由（Begründung）が付記されており，次のように書かれている。ビアガーデンとは，「緑に囲まれた屋外にあり，理想的には大きな木の陰に座ることができる場所」であること。また，「誰もが自由に食べ物を持ち込むことが許され，時間を気にせずおしゃべりにふけることができるビアガーデンは，幅広い層の市民の憩いの場となっており，社会的立場の違いを超えた自然な人間関係を築いてくれる場所であ」り，さらに，「食べ物の持ち込みを可能にすることによって，低収入の人も家族も手頃に楽しむことができる場所である」。

緑に囲まれた気持ちの良い場所で美味しいビールを飲める日常，食べ物を持ち込んで自分の庭のように家族団欒をしたり，仲間と交流したりできる日常，これらがビアガーデン文化を愛する市民のデモを受けて制定されたビアガーデン条例で守られているのだ。バイエルンのビアガーデンがたまらなく恋しくなる。しかも，なにより，ドイツのビールは美味しいのだ。

ミュンヘンのレーベンブロイ・ケラーにて。本人撮影。